

東亜同文書院創立百周年記念式典

財団法人霞山会会長挨拶

近 衛 通 隆

本年五月は東亜同文書院が創立されてより丁度百年を閲しますところ、これを記念する行事が東亜同文書院同窓会である滬友会と愛知大学との共催により開催されますことは、歴史的にみてまことに意義深いものがあると喜ばしく存ぜられ、心からお祝い申し上げます。

皆様ご承知の通り、愛知大学の存在は、東亜同文書院大学の最後の学長、本間喜一先生なくしては語れないのでありまして、敗戦によって閉鎖された東亜同文書院大学の教職員、学生達が、その翌年の昭和二十一年上海から引揚帰国し、非常な苦勞の末、一丸となって愛知大学を創立したのであり、東亜同文書院なくして愛知大学の存在はありえなかつたといえるのであります。

この東亜同文書院を百年前に創立したのは、私の祖父、近衛篤磨こと霞山公であります。霞山公は、十九世紀における西欧列強のアジア侵略、特に中国に対する領土獲得競争が熾烈を極め、中国（當時は清国）に国家崩壊の危機が迫っていたことを憂慮し、日中提携して中国及び東洋の保

全を図ることを目指し、一八九八（明治三十一年）年、東亜同文会を創立しました。

東亜同文会の綱領には、「支那を保全す。支那及び朝鮮の改善を助成す」とあり、当初は、清朝内改革派の康有為ら、あるいは清朝打倒を目指す革命派の孫文らを支援したのでありますが、後に政治活動から離れ、荒尾、根津両先生の流れをくむ日清間の通商経済発展を期する実務優先の団体として、事業の重点を教育、文化に集中することになりました。かくして、東亜同文会は、一九〇〇年に設立した南京同文書院を経て、一九〇一（明治三十四）年、上海に東亜同文書院を創立しました。東亜同文書院は、東亜同文会の「中国保全」の主旨に則り、「中国を富強ならしめ、中日提携の基礎を固めるため、それに必要な中日両国の人材を養成する」という趣旨に基づいて開設された学校でありました。

更に東亜同文書院の源流を辿りますと、荒尾精先生が一八九〇（明治二十三年）年、上海に開設した修学年限三年の

日清貿易研究所に始まるのであります。荒尾先生は、夙に中国問題の重要性を認識した先覚者であり、岸田吟香の漢口樂善堂を拠点にした、三年間にわたる清国調査の結果、長文の報告書を作成し、政府に対し種々の献策を行っていますが、特に日清両国が運命共同体であることを強調し、両国が経済的提携によって共に富強を図り、東亜の防衛を達成することを構想し、清国の事情に通暁する有為の人材を養成することを主張したのであります。また、日清戦争の戦後処理については、領土割譲や賠償要求に反対し、それを求めるときは列国の中国分割を招くとして、三国干渉を予見したのであります。

日清貿易研究所は、非常に資金難の中で開校され、根津先生が代理所長となり苦難の経営が続いたのであります。その間に清国事情啓蒙の大著『清国通商総覧』を編纂出版して、研究所の名声を高からしめたのであります。しかし、日清貿易研究所は日清戦争のため三年間で閉鎖を余儀なくされ、また、不幸にして、荒尾先生は明治二十九年、三十八歳の若さで世を去るのであります。

その死を惜しんで霞山公が、京都若王子に建てた巨大な表彰碑がありますが、荒尾先生の思想的系譜は、霞山公、根津先生へと受け継がれ、東亜同文書院大学の確固たる建学精神として生きているのであります。

書院建学の父といわれた根津一先生は、霞山公に請われて東亜同文会幹事長を兼任すると共に、東亜同文書院の初代院長として二十年間にわたり学生を薫陶したのであります。

根津院長は儒学と禅学を深く収めた人格者であり、東亜

同文書院の開校に当たって、「興学要旨」と「立教綱領」を発表し、建学の精神は、日中提携の人材を育成し、中国及び東亜を保全することにあること、また、教育において智育と共に徳育を重んじることを明らかにしたのであります。先生は、東亜同文書院は単に学問を教えるだけの学校ではない、志を中国に持ち、人格の向上に努め、真に中国人の友となり、日中両国の国交においては覇道を排し王道を理想とし、不正不義は許されるべきではないとの教育方針を実践致しました。

これが「根津精神」として学生の間定着し、日中提携に貢献する多くの人材が、この自由闊達な学園から輩出したのであります。不幸にして、軍部の暴走による中国侵略によって、東亜同文書院建学の精神は蹂躪され、同文書院出身者は事志と異なる悲運を啣つことになりました。敗戦と共に、東亜同文書院大学はその歴史の幕を閉じ、また、その経営母体であった東亜同文会も解散を余儀なくされたのであります。

しかし、霞山会は、東亜同文会の伝統と遺産を継承し、戦後の昭和二十三年に設立され、日中間の教育、文化、研究交流に貢献すべく活動しております。愛知大学も半世紀を閲して立派に成長し、東亜同文書院が果たせなかった夢をわが事として、更に更に大きな発展の歩みを進められんことを心から念願し、書院創立百周年を記念しての私の挨拶と致します。

有り難うございました。